

岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第VI報）

—門入のわらべうた—

高木 靖 弘・小 川 悦 子

An Interim Report on the Oral Literature of Tokuyama Mura, Gifu Prefecture. (VI)

Yasuhiro Takagi and Etsuko Ogawa

We have investigated on the oral literature, wishing the creation of culture for the sound development of children. In this paper we report on the WARABEUTA in Kadonyu, Tokuyama Mura.

は じ め に

この報告は、「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第III報）—本郷・戸入のわらべうた—」（本学紀要第六集所載）につづくものであり、内容として、第III報でとり上げた資料と調査時期（1979年8月）を同じうするものに、同年11月に調査、採集した資料を加えてまとめたものである。

この報告をもって、本郷を起点とした西谷川沿いの戸入、門入地区の第一段階の調査を終り、合計38曲の資料を得ることが出来た。しかし、東谷川沿いの山手、櫛原、塚の三地区は、まだ手つかずで残されており、次回の目標として、下準備の段階にある。

尚、表記にあたっては、第I報からの方法を踏襲し、曲の番号も、通し番号とした。

I

〈調査地域及び、期日〉

岐阜県揖斐郡徳山村門入

清生^{せりう}治良右エ門氏宅にて

1979年8月9日 午前10：00～12：00

〃 11月23日 午後6：00～9：00

〈話者、演唱者〉

調査に入っていてよく感じることであるが、むかし話にしろ、わらべ唄にしろ、よく伝えられている家系というものを見出すことができる。ここ、門入における清生家もその一つで、先代故太郎氏もすぐれた話者であったと聞くが、そのつれあいのしな氏、当主の治良右エ門氏、夫人八重子氏の三人もすぐれた演唱者であった。茶ぶ台を囲み、またこたつに足を入れながら、お互いに思い出しながら、身ぶり手ぶりを交えて歌って頂いた。

現在の徳山村の子ども達もそうだが、演唱者の子どもの頃も、男の子の遊び、女の子の遊びと、あまり分けへだてはなかった様である。治良右エ門氏が、「こんめもしたし、まりつきもしたし」と語っておられる。「おおさいどり」の時には、御夫婦で、手おどりまでして見せてくれた。

以下に、三人の演唱者の略歴を記す。

清生しな氏 1893年（明治26年）5月20日生

門入に生まれ、成人し、門入で結婚、家業の農、林業を営む。

清生治良右エ門氏 1914年（大正3年）4月25日生

故太郎、しな氏の長男として生まれ、家業の農、林業を営む、冬場は杜氏として岐阜の方へ出ていた。現在、門入の氏神社の宮司も兼ねている。

清生八重子氏 1925年（大正14年）2月25日生

治良右エ門夫人、門入で生まれ、門入で成人、治良右エ門氏とはいとこにあたる。

II

〈門入のわらべうた〉

24. てんてんてんまる （てまり唄）

演唱者 清生しな、清生八重子

てん てん てん まる てん まる や あ ぶ ら と ろ と ろ びん と ろ

(か み ゆ う)

と ろ で お ば さ ん の と こ へ あ す び に い っ た ら お わ か い

て)

し ゅ う や - こ わ か い し ゅ う に だ き し め ら れ て お ち ち が

いたいではなししておくれ おちちがいとてはなせん
 けれど おぼんがきたで おびこうて おくれ あかいが
 よいかしろいがよいか あかいいいやがーしろいも
 いやがとうせんばやりのーはかー たおび はかたお
 (ちょうせん)
 び ちょと いっかん わたい た

(出発実音嬰イ M.M. 112 採譜高木)

歌詞

てんてんてんまるてんまるや 油とろとろ^{びん}とろとろで
 * (髪ゆうて)
 おばさんのとこへあすびに行ったら
 お若い衆や こ若い衆に抱きしめられて
 お乳が痛いので離しておくれ
 お乳が痛^{いと}ても離せんけれど
 お盆がきたで 帯買^いうておくれ
 赤いがよいか白いがよいか
 赤いもいやが白いもいやが
 とうせんばやりの博多帯，博多帯
 * (ちょうせんばやりの)
 ちょと，一かんわたいた
 * () 内は八重子氏

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の陽旋法である。

この歌は、第III報「6、てんまりやてんまりや」(p.53.)の歌い出し部分と全く同じといってよく、さらに、「9、こっから見えるは」(p.57)の二節目以降と、この曲の二節目以降が全く同じである。詳しくは、第III報、〈わらべうたの伝承について〉その1) (p.69~70)で述べた。ただここでは、「当世

ばやりの」(本郷・斉藤みのえ氏)「とうせんばやりの」(清生しな氏)「ちょうせんばやりの」(清生八重子氏)の違いを指摘するにとどめる。また、同村他地区の同歌と比べてみると、一、二の欠落部分も見られる。

25. たけのこが出だす (てまり唄)

演唱者 清生八重子

たけのこ が で だ す い や ま か さ と の う ぐ い す や し ま の
 - か ぞ え そ ろ え て - か ど - に た つ か ど に た
 つ ちょい と いっ かん か や し た

(出発実音嬰ハ M.M. 112 採譜高木)

歌詞

たけのこが出だす いやまか里の
 うぐいす やしまの 数えそろえて
 門かどにたつ 門かどにたつ
 ちょいと 一かんかやした

この歌は、八重子氏によると前曲「てんてんてんまる」の返し唄として歌われたとのことである。旋法は、前曲最後の一節「ちょと一かんわたいた」から四度高く転調して、レ、ミ、ラ、ド、の陽旋法で核音はレ、である。

前曲につづけて歌われたというが、詞でみる限り、関連性は全くない。旋律においては前曲「博多帯——」以降と、本曲「門にたつ——」以降とは全く同一である。本曲は今回初めて採集出来たものであり、⁽¹⁾岐大資料にも集録されていなかった。

26. こんめをした (お手玉唄)

演唱者 清生しな, 清生八重子

こ ん め お し た お め つ に お さ わ お さ わ - お さ わ -

よいつもさんご さきさ わんこ ひよりにとって

ひとついし ふたついし みつついし よつついし ひとついし むつついし

ななづか がに がに ばいばらぎっしゃりのにせ やませ

ばいばらぎっしゃりだーだに だーだに げんしろ わかれーいし わかれーいし

わかつ た ぐんないぬけぐんないぬけ たかのつめ たかのつめ

まるーやま まるーやまだ れにいっ こん かし たい な

じろさん いっ こん わ たい た

(出発実音嬰ハ M.M. 126 採譜高木)

歌詞

こんめおした，おめつにおさわ
 おさわ おさわ よいつもさんご
 さきさわんこ，ひよりにとって
 ひとついし，ふたついし，みつついし
 よつついし．ひとついし，むつついし，
 ななづか，がに，がに，ばいばらぎっしゃり，
 のにせ，やませ，ばいばらぎっしゃり，
 だーだに，だーだに，げんしろ
 わかれいし，わかれいし，わかつた
 ぐんないぬけ，ぐんないぬけ

たかのつめ、たかのつめ

まるやま、まるやま、誰に一こんかしたいな

治良じろうさに一こんわたいた
(相手の名前)

この曲の旋法は、ラ、ド、レ、ミ、の四つの音列からなる陽旋法、核音はレである。

「こんめ」とはお手玉のことで、二個あるいは三個のお手玉を投げ上げ、また、下に投げ広げたお手玉を一つ取って投げ上げ次の一つを取るといった遊びをする。

「ばいばらぎっしゃり」ということばがあるが、歌う度に入ったり入らなかったり、入る場所が違ったりした。これは動作によって、入れる場所が変わるとのことである。また、「わかれいし」以降の三連符のリズムも、動作の遅速によって、変ることがある。

詞は部分的に解することが出来ることばはあっても意味は不明。

同歌は同村他地区、⁽²⁾山手にも見られる。また同歌で、おはじき唄としても歌われたふしもみられる。

27. おおさいどりかい (手おどり唄)

演唱者 清生八重子, 清生治良右エ門



おおさいどりかい さいどりかい べんない こんない かなこん



ない まくらもとに おいたれば ねずみがこそこそ



すってらてん いちのきにのきさんのきさくら ごよまつ



やなぎ やなぎのうらで ゆみいっちょうひろっておおもりこもり



ちわんのかけを くるまにのせて そらひけだるま いざや



わかいしゅはなおりいこか はなはなにばな ーぼたんしゃくやく

つつじばな いっぽんおりゃてにもち にほんおりゃこしにさし さんぼんめで
ひがくれて からすのすにとまろか とんびのすにとまろか からすのすはつちくそて
とんびのすにとまって あさおきて みれば ちよのようなめいしょうが ささえの
おびを まえにちょっこり むすんで うまにのって でよった でよった

（出発実音ロ M.M. 116. 採譜高木）

歌詞

おお*さいどりかいさいどりかい

*べんない、こんない、かなこんない、

枕もとにおいたれば、ねずみがこそこそすってらてん

一の木、二の木、三の木さくら、五葉松、柳

柳のうらで、ゆみいっちょ拾って

おおもり、こもり、茶碗のかけを、車に乗せて、そらひけたるま

いざや若い衆、花折り行こか

花はなに花、ぼたん、しゃくやく、つつじばな

一本折りや手にもち、二本折りや腰にさし、三本目で日が暮れて

からすの巣にとまろか、とんびの巣にとまろか

からすの巣は土臭^くて、とんびの巣にとまって、朝起きてみれば、

千代のような名娼^{めいしょう}が、ささえのおびを、前にちょっこり結んで

馬に乗って出よった

*さいどり……才取り、左官の助手、壁土などを差し出す手つきから、手おどりの最初の詞になったもの。

*べんない、こんない、かなこんない……紅、こうがい、かんざし

この曲の旋法は、ラ、ド、レ、ミの四つの音からなる陽旋法で、核音は、ラ、レ、である。遊びは、現地では手おどりといっているが、一般的には手合わせといわれるもので、二人が向い合って、一つ手を打っては、次に相手の手の平と打ち合わせる動作を左右交互にくり返していく遊びである。その

手つきが、壁を塗る手つきに似ていることから、歌い出しのことは「おお才取りかい才取りかい」が生まれて来たのもうなずける。

同歌は、同村内に見られ、⁽³⁾山手、戸入などに見られる。ただし戸入のものは、「いざや若い衆」の部分から歌い出されており、「おおさいどり……」以降、前半の大部分が欠落している。そのことを戸入の演唱者山本花枝氏に、後日確認したところ、「そういわれれば、もっと前に何かついとったような気もするが、忘れた。」とのことであった。

28. かあかあ勘三郎 (鬼きめ唄)

演唱者 清生八重子



(出発実音イ M.M. 96 採譜高木)

歌詞

かあかあ勘三郎

鳴いた方へちょっと向け

この曲は、鬼きめ唄で、その方法は、木の枝あるいは、笹竹などの先を鍵形に折り曲げ、両手の平の中にはさみ、竹とんぼを飛ばす要領で、唄に合わせて回転させる。そして折れ曲がった先が指し示した所に当たった人が鬼になるというものである。治良右エ門氏の言によると、棒を回す人の好きな所へ手加減してとめたものだそうである。

29. びんびんここのつ (鬼きめ唄)

演唱者 清生八重子



(出発実音ハ M.M. 104 採譜高木)

歌詞

びんびんここのつ、ろうろうろうたん
 かわせのしるくって、あぶらしかもしか、
 ほんやくぬいたら、かけぬいた
 ちんぽんたーろーり

この曲も鬼きめ唄で、丸く輪になって、この唄を歌いながらその中の一人が指さして順々に数えてゆき、「ちんぽんたーろーり」で丁度当たった人が鬼にきまるというものである。

ラ、ド、レ、ミ、の音列を使った陽旋法で、核音は、ラ、レ、である。

30. ひとりふたりはいめの子（鬼きめ唄）

演唱者 清生八重子

ひとりふたりはいめのこよったり
 だいぶつきつねのこしよしよしよやの
 ばばくそたれた

(出発実音 = M.M. 132 採譜高木)

歌詞

ひとりふたり、はいめの子
 よったり、だいぶつ、きつねの子
 しよ、しよ、庄屋のばば、くそたれた

この曲も、前曲同様の方法で行う鬼きめ唄である。ラ、ド、レ、の三つの音を使ったテトラコードで、核音はレである。

28, 29, 30, と三曲の鬼きめ唄が続いたが、動物を扱ったもの、呪文的なもの、囃し唄的なものと、鬼きめ唄の特徴をそれぞれよく表わしている。一般的に、鬼きめ唄は数とり唄（だるまさんがころんだ、の類）とも通じるものであって、全国的にも多くの類歌が見出される。30, のほとんど同歌と見られるものをここに例としてあげておく。

(4)一人、二人、三めの子

とってなめろくそさらい，以下略

31. なかのなかの小坊主 (鬼あそび唄)

演唱者 清生八重子



なかのなかのこぼうず なんで せが ひくなっ
た おやの ひに ととくっ て そんで せが
ひくなっ た うしろの ちょうめん だ ー れ

(出発実音ハ M.M. 126 採譜高木)

歌詞

なかのなかの小坊主，なんで背が低なった
親の日にとと食って，そんで背が低なった
うしろのちょうめんだーれ

この曲の旋法も，ラ，ド レ，ミ，の陽旋法で核音は，ラ，レ，である。

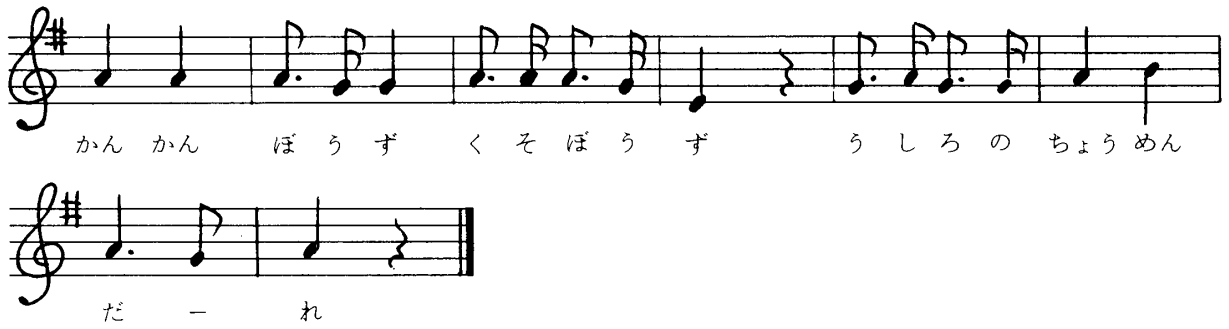
この曲は，全国的にみられる唄で，詞もほとんど大差はない。小坊主が，小仏，地藏様，小法師，小僧さん，などといい，また，ととくってが，えび食って，どじょう食って，などに変っている。むしろ同村戸入，本郷地区に見られる「ぜんまいわらび，どして腰わがんだ，親の日にさかな食って，ほんで腰わがんだ」の方がめずらしい型で，門入の方が標準型といえる。

32. 坊さん坊さんどこいくね (鬼あそび唄)

演唱者 清生八重子



ぼうさん ぼうさん どこいく ね わたしは たんぼの
いねかり に おまえがくると じゃまになる この



（出発実音ハ M.M. 126 採譜高木）

歌詞

坊さん坊さんどこいくね
 わたしは田んぼの稲刈りに
 おまえが来るとじゃまになる
 このかんかん坊主，くそ坊主
 うしろのちょうめんだーれ

この曲も全国的に有名なわらべうたで、同村内他地区にもみられる。ただし、一般的な曲に比べて、明らかに「わたしも一緒につれしゃんせ」の部分が欠落している。また、「うしろの正面だーれ」の部分を「うしろのちょうめんだーれ」と歌っているのも、前曲31. と同様であり、演唱者だけのくせではなく、治良右エ門氏もそのように歌った。

旋法も前曲同様，ラ，ド，レ，ミ，の陽旋法で，核音も，ラ，レ，である。

33. ちんこばあらば（片足とび唄）

演唱者，清生八重子，清生治良右エ門

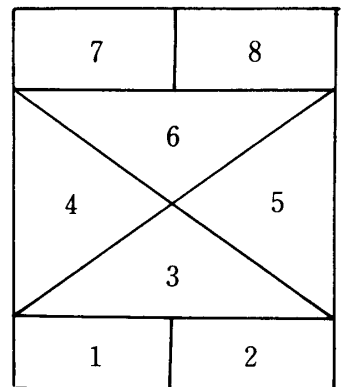


（出発実音ハ M.M. 84 採譜高木）

歌詞

ちんこば，あらば
 ちんこちんこちんこ，あらば

この曲は、いわゆる「けんけんば」で、片足とびあそびうたである。右のような図形を地面に書き、石を投げ入れ、そこを避けて片足とびで通り抜ける。勿論、相手の石のある場所も避けて通らなければならず、そうして早く上った方が勝ちになる。歌う時も上記の様な歌詞になると

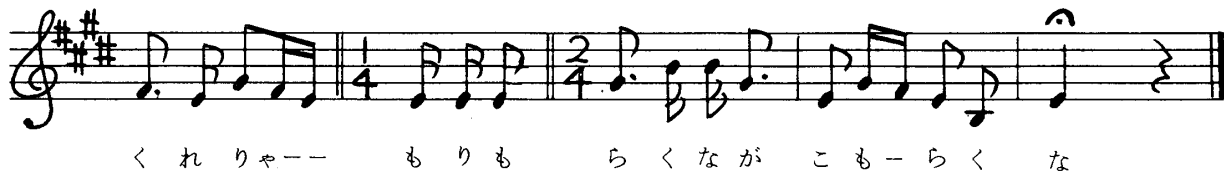


は限らず、石の置いてある位置によって歌い方が変化する。すなわち、片足とびの時は「ちんこ」、両足で止まる時は「ば」「あらば」となるので、必然的に変わってくる。

旋法は、ラ、ド、レ、ミ、の陽旋法で、核音は、ラ、レ、である。

34. ねんねんねりの木 (子守唄)

演唱者 清生八重子



(出発実音イ M.M. 84 採譜高木)

歌詞

ねんねんねりの木、かあかあ榿の木

榿の木の枝に、ほろがさがって

*おんばよ、おんばよ*ついでくよ

針がのうて、*つげようか

隣へ行って借りて来て

隣にないとてかやされて

麻種三つぼもろて来て

それをまわりに蒔いといて

*うんでしらべて*ののにして よいよいよいよー

ねんね、ねてくよ、ねてさいくれりや

守もらくなが、子もらくな

※おんばよ……案配よく

※つぐ……縫う

※うんでしらべて……^う績んで整えて、つむぐこと、

※のの……布

この曲は、第III報本郷の齊藤みのえ氏が歌った子守唱「14、ねんねころいち」（第III報p.60）と同歌である。ただし、本曲ではそれも「ねんね、ねてくよ……」以降で、前半の部分は全く別の曲が付いている。八重子氏に確めたところ、本曲の様に歌うのが常だったとのことである。既出の資料の中にも、後半部分の曲は、前述の本郷の他、戸入、山手等に見出されるが、前半部分は、門入だけである。楽曲的にみると、前半部分は、単純な旋律のくり返して歌われ、後半部分は転調し、メロディカルな旋律で歌われる。他地区の場合の様に、それぞれ別の曲が、門入では続けて歌われる様になったと考えるのが妥当であろう。

旋法は、前半が、ラ、ド、レ、のテラトコードで核音はラ、11小節目から転調準備に入り、13小節目よりの後半部は、ド、レ、ミ、ソ、の呂旋法で、核音は、ド、ソ、である。

35. ことしはじめて（子守唄）

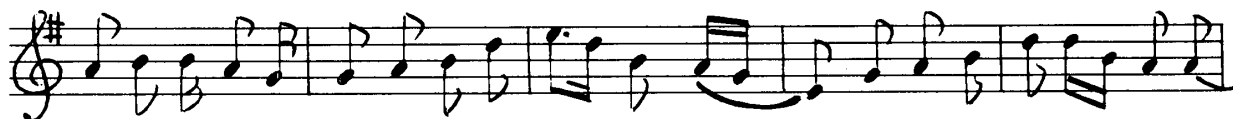
演唱者 清生八重子



ことしはじめて もりぼうこしーたらー おしょう
 おびにゃみじかーしたすきにゃなーがしー これ
 そめるこうやーもいとしてなーらぬー いちにゃ
 さんにゃさがりふーじしにゃししぼーたんー 一つ
 むつつもみじーをばらりとそーめてー ななつ



さまーからきれさんじゃく もーろーてー ことのつ
 なんーでもてぬぐいに そーみよーかー
 いちのまつににゃかき つーばーたー
 いやーまのせんさく つーつーじー
 なるーてんやつやえ ざーくーらー



こもんーをばらりとそーめてー とおでとのーさの



— な の り さ を そ — み よ か や — — — れ —

(出発実音へ M.M. 72 採譜高木)

歌詞

今年初めて守奉公したら お主さまからきれ三尺もろて
 帯にや短かしたすきにや長し これはなんでも手拭に染みよか
 染める紺屋も愛してならぬ 一にゃ一の松，二にゃかきつばた
 三にゃさがりふじ，四にゃししぼたん 五ついやまのせんさくつつじ
 六つもみじをばらりと染めて 七つなるてん，八つ八重桜
 九つこもんをばらりと染めて 十で殿さの名のりさを染みよか，やーれ

この曲は、子守唄の範疇に入れたが、演唱者自身によると、子守で歌ったことはないとのこと、若い娘のころ、母親の白すりを手伝いながら習い覚えたとのことである。

楽曲的には、音域も広く、優美な節まわしで、大変美しい曲である。演唱者も、ほぼ成人してから覚えたことといい、子どもの唄というよりも、大人達が歌った唄といえるかも知れない。

旋法は、ラ、ド、レ、ミ、ソ、の陽旋法が使われている。

36. うらのうらの (てまり唄)

演唱者 清生八重子



う ら の う ら の し し の き に す ず め が さ ん ば



と ま っ て い ち わ の す ず め の い う こ と に や



と う さ ん か あ さ ん き い て く れ わ た し が お お き く



な っ た ら ば う ら の は た け に み せ だ し て



ご - ざ が さ ん ま い ろ く ま い びょう
 み し ろ が さ ん ま い
 あ わ せ て ろ く ま い



ぶ に う ら の ね え さ ん か く さ れ た

（出発実音嬰 = M.M. 126 採譜高木）

歌詞

うらのうらのししの木に すずめが三羽とまって
 一羽のすずめのいうことにか 父さん、母さん聞いとくれ
 わたしがおおきくなったらば うらの畑に店だして
 ござが三枚 みしろが三枚 あわせて六枚 六枚屏風に うらのねえさんかくされた

この曲の旋法は、前半「……うらのはたけに店だして」までは、ラ、ド、レ、の三つの音を使ったテトラコードで核音は、ラ、レ、の単純な旋律であるが、後半「ござが三枚……」以降、音域が広がって、ソ、ラ、ド、レ、ミ、からなるはなやか旋律となり、核音はやはり、ラ、レ、である。全体を通して陽旋法が用いられている。

本郷の齊藤みのえ氏が歌った、第III報「10、わしんうしろの」(p. 57)と比較してみると、後段は歌詞の内容も旋律も著しく違いがあるのが解る。すなわち、本郷の方は「よんべ貰った花嫁を……」と物語風に話しが発展しているが、門入の方は、「六枚屏風……」で終わってしまっている。全国的にも、本郷型の方が類歌が多くみられる。⁽⁵⁾「千松手まりうた」(京都)⁽⁵⁾「白木屋のお駒さん」(京都)等がある。

37. すらすら一ぱいすすろ (てまり唄)

演唱者、清生八重子



す ら す ら い っ ぱ い す す ろ い っ ぱ い す す た ら



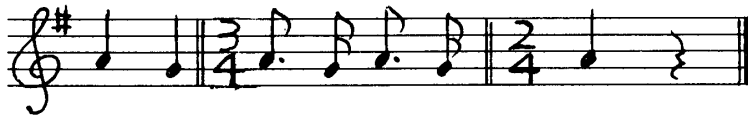
おはぐろつけよ おはぐろつけたらおしろい
 おしろいはいたらくちべに
 くちべにぬったらあかべを
 あかべをきいたらあかおび
 あかおびしめたらねねさを
 ねねさをだいたらねねさを



はけよ ねねさをおんだらよつばもからだも
 ぬれよ
 きよよ
 しめよ
 だけよ
 おべよ



とおまでたたけ ひふみよ いつむ



ななや ここと お

(出発実音嬰イ M.M. 116 採譜高木)

歌詞

すらすら一ぱいすすろ、一ぱいすすたらおはぐろつけよ
 おはぐろつけたら、おしろいはけよ
 おしろいはいたら、口紅ぬれよ
 口紅ぬったら、*あかべを着よよ
 あかべを着たら、あかおびしめよ
 あかおびしめたら、*ねねさを抱けよ
 ねねさを抱いたら、ねねさを負べよ
 ねねさを負んだら、よつばもからだも、^{とお}までたたけ
 ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、ここ、と一お
 ※あかべ……晴着
 ※ねねさ……赤ん坊

この曲も、本郷の斉藤みのえ氏が歌った「すすれすすれいっぱいすすれ」(第III報, 19. p.65)と同

歌である。本郷の曲が未完であったのに対し、本曲はほぼ完全な曲で採集出来た。

遊び方も全く同じで、「おはぐろつけよ」「おしろいはけよ」「口紅ぬれよ」「あかべを着よよ」「あかおびしめよ」「ねねさを抱けよ」「ねねさを負べよ」の後の休止符のところ、それぞれの所作をするのである。

旋法は、ラ、ド、レ、ミ、の陽旋法で、核音は、ラ、レ、である。

38. じょりかくし（鬼あそび唄）

演唱者 清生八重子

じょんじょんじょんじょんじょりかくし おじょりはどこいった
 た おてらのぼんさんが おじょりで
 は なかんで もったいないことしよった

（出発実音ハ M.M. 116 採譜高木）

歌詞

じょんじょんじょんじょんじょりかくし
 おじょりはどこいった
 お寺の坊^{ぼん}さんが、おじょりではなかんで
 もったいないことしよった

岐阜地方で歌われる草履かくし遊びの基本的な形の「じょりかくし」である。この後に「牛買おか、馬買おか……」がついたり、途中部分から「子ども衆のじょりは、めんたいじょりだ……」と発展していく形もあるが、本曲の形が最も一般的である。ちなみに、後日、戸入に於て子どもから採集した「じょりかくし」は全くこの形であった。

旋法は、ラ、ド、レ、のテトラコードで、核音は、レ、である。

III

〈わらべうたの伝承について〉

ここでは、今回採集した一般的な遊び、「じょりかくし」をとり上げて、比較・検討をしてみることにする。

A1
 じょんじょんじょんじょんじょりかく し おじょ り は どこいっ

A2
 じょんじょんじょんじょんじょりかく し おじょ り は どこいっ

B
 じょんじょんじょり じょりかく し

A1
 た おて ら の ぼん さん が おじょ り で

A2
 た おて ら の ぼん さん が おじょ り で

B
 おて ら の ぼん さん が おじょ り で

A1
 は な か ん で もっ たい な い こ と し よ っ た

A2
 は な か ん で もっ たい な い こ と し よ っ た

B
 は な か ん で もっ たい な い こ と し ち ゃ っ た

A 1, No.38. 清生八重子. 1979年 8月採集

A 2, 清生八重子. 1973年採集⁽⁶⁾

B, 戸入の子どもたち, 1979年 8月採集

上記の楽譜から、A 1とA 2は、同一の演唱者から採集されたものであるが、採集時期に於て、6年の経過がみられる。

二つを比べてみると、歌詞は全く同じであるが、リズム、旋律に明瞭な違いが出ていることがわかる。A1では、3、7、15小節目が符点で歌われているのに対し、A2では、同じ部分が八分音符で歌われている。また、旋律でも、A2では、6、10、14小節目が、ラ、に下っているが、A1では、6、10小節目は下らず、14小節目だけが下っている。すなわち、ド、レ、ラ、ラ、という音の動きがくり返されるA2の方が楽曲的にみて統一がとれているということが出来る。同一の演唱者で、これだけの違いがみられるということが不思議にも思われるが、それは、6年の年月の経過と、採集の場、雰囲気によるものであろうと、考えられる。リズムは、気分的にはずんだものになっているし、旋律的には、A1の方が、Bの現在の子どもの曲に近くなっている。

Bは、戸入の子どもたちに、実際に履物を並べて「じょりかくし」の遊びをして貰いながら採集したものである。A1、A2、と比べてみると、歌詞に欠落部分「おじょりはどこいった」が見られ、さらに、最後の詞の語尾「しよった」が「しちゃった」と、関東風標準語的に変化している。Bの場合は、4小節目ずつのフレーズがくり返され、統一がとれていて、数とり唄として、何度も何度もくり返して歌うには、歌い易くなっている。また、「おじょりはどこいった」の部分が欠落したことにより、16小節に納まるということは、結果として、楽式的にも、まとまったものになった、ということが出来る。

八重子氏が子どもの頃、すなわち、昭和の初め頃には、この形の「じょりかくし」の遊びが行われていたのであるが、しな氏の時代には、この形の「じょりかくし」がなかったことが、採集時の話の中で確認された。しな氏の時代、つまり、明治の終り頃には、むしろ同世代の北村つま氏（第I報、p.54. No.4、参照）、斉藤みのえ氏（第III報、p.63. No.16、参照）の「じょりかくしくねんぼ」の唄が歌われていたと考えるのが妥当であろう。

これらのことから、「じょりかくし」が、いつの時点から、あるいは、「じょりかくしくねんぼ」がいつの時点までと、伝承形態を限定することは、出来得べきもないが、今後、そのあたりに焦点をあてて、掘り下げてみるのも興味深い課題である。

くま と め

この報告は、最初に述べた如く、第III報と、調査時期を同じくするものである。したがって、第III報のくまとめで述べた成果と、課題の上に、さらに、以下の諸点を加えたい。

その第一は、門入地区での一連の調査で、15曲の多きを数える資料が得られたことである。

第二には、ここでも、未採集の新曲「25. たけのこが出だす」を掘り出すことが出来たことである。さらに歌われ方についても、過去の資料では、別々の曲として扱われていたものが、つづけて一つの曲として歌われるのが常であったということも確かめられた。

第三に、私たちが、すぐれた話者、演唱者のある家に恵まれたということである。このことは、門入の清生家に限らず、戸入の増山家、本郷の斉藤家でも同様で、そこを拠点に、さらに、この調査・研究を深める手がかりが得られ、今後の私たちの調査、研究の進展が期待出来ることである。

こうした成果の上になって、今後の研究を進めたいと考える。

おわりに、この調査にあたって、同行協力頂いた、中京女子大学高橋美代子氏、滋賀県立短期大学野部博子氏、京都市の小島好江氏には深く感謝する次第である。

また、清生家の御家族、治良右エ門氏、八重子氏御夫妻、それに御母堂しな氏には、一方的に御迷惑も省みずおしかけ、採集に協力頂いたこと、ここにあらためて深大なる謝意を表する次第である。

注

- (1) 岐阜大学教育学部編郷土資料(5)岐阜県のわらべうた今昔、徳山村篇
- (2) 同上 p.68楽譜No.95
- (3) 同上 p.82楽譜No.92
- (4) 社会想思社刊、尾原昭夫編著、日本のわらべうた、室内遊戯歌編p.57.
- (5) 柳原書店刊、日本のわらべうた全集、15、高橋美智子著、京都のわらべうた、p.60. 62.
- (6) 岐阜大学教育学部編、郷土資料(5)岐阜県のわらべうた今昔、徳山村篇、p.76. 楽譜No.69

(1980. 10. 9. 受理)